第１０１回例会報告

札幌エルプラザ、２０２２年７月３日（日）
参加者数３２名（うち会員２２名）
［第１部］詩劇『祖霊祭』
［第２部］希求・日本
［第３部］希求・ポーランド

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ
元大使からのメッセージ

皆さんこんにちは！　本日は、北海道ポーランド文化協会の皆様の「午後のポエジア」の会に際し、ご挨拶をさせていただくことを大変光栄に思います。

ご承知の通り、私は北海道を何回も訪れましたし、北海道ポーランド文化協会のゲストとして昔大変お世話になりましたので、懐かしいお顔が大勢いらしゃいます。

今日は私にとって特別な午後です。ポーランドの恋愛劇の最も重要な作品の一つ、アダム・ミツキェヴィチの『Dziady 祖霊祭』の断片を読んでいただきます。皆様がご自分の感性で、どう読み、どう理解されるのか、ドキドキしています。

ご存知かもしれませんが、今年、私たちはアダム・ミツキェヴィチ・インスティテュートの資金援助により、特別なプロジェクトを準備しております。「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラッパ・クンネニサッ」と呼んでいます。最後の2つの言葉「シンヌラッパ・クンネニサッ」は、アイヌ語で「祖先の霊への祈り」と「夜明け」を意味します。今年11月に実現し、28日に最終発表を行う予定です。

ミツキェヴィチは、ギリシャ悲劇のような西欧型の演劇ではなく、死者の魂を呼び鎮魂するには何が必要かを問い、民俗習慣・信仰・行事をベースにして、ポーランド独自の演劇を創り出そうとしたのです。彼は、古代ギリシャや後のイギリス・フランス・スペインの演劇のように、ヒーローが冒険し、戦い、愛し、舞台上で生きるタイプのドラマよりも、この伝統のほうがスラヴの感性にとって重要だと考えました。精霊と人間との交感のほうが重要であり、人の心を変えることができると考えたのです。

こういう考え方はポーランド文学の中のロマン派の特徴でもあります。古い唯一のスタイルではなく、フランス革命後、ヨーロッパ社会を動かした合理主義と物質主義、人間関係の破壊などを如何に乗り越えるかを考えて、新しい感性が生まれました。以上、ポーランドロマン派の独特な意味の簡単な説明をさせていただきました。

本日の朗読会の参加者、北海道ポーランド文化協会の皆様、ご来賓の皆様のご尽力により、このような会を開催することができまして、大変感謝しております。安藤先生には、連絡や調整をしていただき、いつも会誌「POLE」を送っていただき、今日はこのメッセージを私の代わりに読んでいただいて、まことにありがとうございます。

どうぞ楽しい午後をお過ごしください。11月にお目にかかれますことを首を長くして待っております。

2022年7月3日

Jadwiga Rodowicz-Czechowska
スレユヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館

「午後のポエジア」2022/7/3　　詩劇『祖霊祭』　（写真 安藤厚）

ポーランド広報文化センター INSTYTUT POLSKI TOKIO
Ministry of Culture and National Heritage of the Republic of Poland
ADAM MICKIEWICZ INSTITUTE
Co-financed by the Minister of Culture and National Heritage of the Republic of Poland
The year of Polish Romanticism
Muzeum Józefa Piłsudskiego w Sulejówku

第１０１回例会に寄せて

ミツキェヴィチ『祖霊祭』を読んで

栗原 成郎

ミツキェヴィチ

アダム・ミツキェヴィチ作『祖霊祭 ヴィリニュス編』（関口時正訳、未知谷、２０１８）を読み、ポ文協の朗読会「午後のポエジア」（２０２２/7/3）での諸兄姉の熱演を動画により鑑賞させていただいたのを機に、心に浮かんださまざまな想念を少し整理してみました。

ベラルーシ起源のポーランド人

アダム・ミツキェヴィチ（1797～1855）はリトアニア大公国のノヴォグルデ（現在はベラルーシ領）の近郷ザオシェで生まれ、ベラルーシ起源のポーランド人であると言われている。彼の生まれ育った地域は元来リトアニア人の居住地であったが彼の時代にはすでにベラルーシ人の農村だった。リトアニア大公国はヨーロッパのなかでキリスト教受容が最も遅い国で、1387年に大公ヨガイラがポーランド王女ヤドヴィガとの結婚によりカトリックに改宗するまでは異教の国だった。

先祖の霊が一定の時に自分の家へ帰ってくるという民間信仰は多くの民族に共通に見られるが、ミツキェヴィチは意図して『祖霊祭』に「ヴィルノ（ヴィリニュス）」の形容詞をつけている。この祖霊祭はバルト系の民間行事なのか、それともスラヴ系なのか？『祖霊祭』のテクストから見れば、スラヴ系と考えられる。

第二部の祭司（guślarz）は、原義はベラルーシ語で「グースリ gusli」と呼ばれる琴を弾奏してその楽の音（ね）と呪文により死者の霊を呼び出す呪術師・祓魔師（ふつまし）である。作中ではキリスト教（カトリック）と習合した異教の祭司である。

「《父と子と精霊》の名において W imię Ojca, Syna, Ducha」という祓魔の呪文はキリスト教の典礼の言葉を真似ているが、「霊 Ducha」には《聖なる Święty》という形容詞が欠けている。そのためこの「霊」は「夜の霊」でも「死霊」でも「悪霊」でもありうる。関口先生は苦心して「精霊」と訳された。

第四部に登場する、ギリシャ・カトリック（東方正教会の典礼を用いるカトリック教会）の正式な司祭（ksiądz）は、第二部のような「祖霊祭」を異教に端を発する迷信として廃止した人物であり「父と子と聖霊の名において W imię Ojca i Syna i Świętego Ducha」というキリスト教の典礼の言葉を用いている。

異教祭司は楽人にして歌人（うたびと）であり、男女の村人から成る合唱隊（コロス）の音頭取りでもある。祭司は「口寄せ」により死者の霊を呼び出す。

亡霊たち

最初に出現する亡霊は二人の稚（いとけな）い子どもで、人生の苦難や試練を経験していないために天国へ行けないで、有翼天使として「楽園」（天国の一歩手前）を飛び回っている。合唱隊は「只の一度も苦味を味わわざりし者は、天国で甘味を味わうことも叶わぬもの」と亡霊の格言を復唱する。

次の亡霊は恐ろしい姿の妖怪。生前は極悪非道の領主であったために、彼に虐待された農奴たちの怨霊が猛禽となって彼の肉を啄（つい）ばみ苦しめる。生前人間らしい行為をしなかった者は、「只の一度も人間であったことのない者は、人間によって助けられることもない」と非難される。

第三の亡霊は若い美しい羊飼いの娘ゾーシャ、誰の愛にも応えなかったために天国へ行けない。「只の一度も地面に足を着けざりし者は、決して天国に昇ることも叶わぬもの」と合唱隊はうたう。この娘の救済には愛が要求される。第一の霊は天使に、第二の亡霊たちは妖怪や猛禽に転生しているが、羊飼いの娘は妖異への転生ではなく幽霊として美しいままに現れる。人を愛することのできなかった孤高の美女は生前においても幽霊のような存在だったのだろう。幽霊には脚が無いため「若者たちによって両手をしっかりとつかまれて地面に引き下ろしてもらわなければ、足が地に着かない」と言う。

追善供養の宴

ポーランド語の「Dziady 祖霊祭」に対応するのはベラルーシ語の Dzjady のみで他のスラヴ語に直接対応する言葉はない。ベラルーシ人は異教時代（6～9世紀）にバルト系のリトアニア人の居住地に進出して新開地の風土に順化し、バルト系人種と混血もした。ベラルーシ人の死生観によれば、春に自然が冬の眠りから目覚めて再生するとともに死者の霊魂も蘇って地下の世界から出てきて自分の家へ帰る。死者の霊たちは、生前自分たちが食べたり、飲んだりした食物、飲物を要求する。祖先崇拝のしるしとして人々は定期的に追善供養の宴を催し、死者の霊たちを招待する。

リトアニア地域では追善の宴の時に香を焚き招魂

の歌をうたう。饗応は年に数回、ふつう土曜日に催される。ベラルーシ西部では家の中に入ってくるのはその家で死んだ人に限られる、と考えられた。自然な死に方（病死、老衰死）をした人の霊は家の中に入ってきて饗宴に加わり家政を見守るが、自殺や他殺の人の亡霊は窓越しに家の中を覗くだけだという。

このような死者追憶は、11月1日を「万聖節（全聖人の日）」として教会で記念し、翌11月2日に「万霊節 Zaduszki」として墓地や家庭で帰天者を追悼するカトリックの年間行事とは異なる。

（くりはら・しげお、東京大学名誉教授）

挿絵 by Czesław Borys Jankowski,
from Adam Mickiewicz - Dziady część I, II i IV, 1896

午後のポエジア～祖霊が導くその先には

人類がまさかの激しい揺り戻しを目の当たりにし、命と暮らしに甚大な被害を被り戦火逃れるウクライナ避難民の受け入れの先陣に立つポーランドの人々の、他人事には出来ない良心に注目が集まった冷たい春先、ミツキェヴィチ作『祖霊祭』という題材を「午後のポエジア」に、という提案が届きました。

これは必然、お断りのしようもないリアルさで迫りました。祖霊という言葉の、民族的かつ人類共通の祈り、鎮魂の儀礼は、特に日本的な供養、お盆のお迎え・送りに直結し、如何に生きるかというフィロソフィーへの誘いでもありました。

しかし現実には、コロナ禍による活動の空白期間による企画意識の停滞や人材の幅の狭まりから、第一詩集200年記念のミツキェヴィチの尊厳性・文学性に充分応えられるか、不安もありましたが、安藤会長の後押しもあって、企画がスタートしました。

困ったのは登場人物の多さです。本編にキャラクターが10以上、無言劇的なニュアンスの含みもあり…。そこで知人の札幌在住の林家とんでん平師匠（初代林家三平最後の弟子）＝右写真＝に懇願し、お一人で3役をこなして頂きました。当日のリハーサル、初顔合わせでスタンバイ。本番はさすが見事に演じ分けて、その熱演は好評を博しました。

『祖霊祭』におけるミツキェヴィチの命題は、準備の間も意識の線光から離れず、未だその幽玄の門からはるか奥の院を遠目で眺める程度ですが、本年は祖霊と現世の狭間を行きつ戻りつとなりましょう。

朗読会の第二部、第三部は「希求」をテーマに、それぞれの世界観に浸り堪能できたかと思います。

この度はコロナによる活動停滞後、また世代交代の過渡期となりまして、行き届かない面も多々ございましたが、今後さらに裾野を広げた「午後のポエジア」継承の一助となれば幸いです。

一刻も早く地上の争いが無くなり、人々の平安が戻る事を切に祈って。

（熊谷敬子、運営委員）（写真 尾形芳秀）

ウコラマッカラプ（お互いの魂に触れる）

祖霊とは、先祖の霊魂である。国や地域、信仰、慣習、儀礼形態によってかなり異なる。

北海道ポーランド文化協会主催の「午後のポエジア」、詩劇『祖霊祭』を鑑賞した。

元駐日大使のヤドヴィガ・ロドヴィッチさんに協力してポーランドの国民的詩人、アダム・ミツキェヴィチ作を取り上げたものだという。小さな会場の舞台を上手く使い、演者の方々の熱意や想い、悲哀がとてもよく伝わってきた。

今秋、ヤドヴィガさんとアイヌ女性で「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラッパ・クンネニサッ（夜明け）」を開催予定である。アイヌの風習の祖霊は、シンヌラッパ（先祖供養）といい、おいしい食べ物があると、火の側とか外の祭壇の前で先祖の名を言いながら、供物を置くものである。

お互いの祖霊や文化が融合した『祖霊祭』がどのようなものになるのか？ 演じて何を感じ、何を受け取れるのかと、今から魂が騒いでいる。

（多原良子、メノコモシモシ代表）

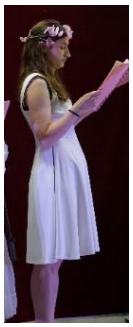
https://www.youtube.com/playlist?list=PLBS8QnZswkMntwatdr0PBX3RBIq6N5PUZ

■本当にありがとうございました。「ポエジア」の写真を見て、衣装やポーズなど、みなさんがとてもよく準備されたことに感激しています！とても素敵です。YouTube で拝見するのが楽しみです。／（その後）YouTube 録画を見て、とても感動しました。たくさんのアイディア、人々の関わり方、シンプルで美しい形。詩とはこういうものなのだと思います。それに、ミツキェヴィチは、自分の詩が日常の人々の屋根の下に降りてきて、必ずしも大きな劇場で上演されるわけではなく、シンプルな人の輪の中で共有されることを夢見ていたのです。ありがとうございました！

（ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ）

■いつも最新情報を送っていただき本当にありがとうございます。ポーランドと日本がこんな風に協力し合えるなんて稀有なことです。

（ダヌタ・オニシュキェヴィチ Danuta Onyszkiewicz, ユゼフ・ピウスツキのひ孫）



■今回のポエジアは画期的だと思いました。ポーランド語と日本語のバランスが取れていました。

『祖霊祭』で、シルビアさん＝左写真＝が何か言うたびにラーラーと言って一回りしていました。中世ヨーロッパの吟遊詩人は町の城門であのように詩を読み、ステップを踏んだのだろうと思います。出演者の皆さんの熱演で本物のヨーロッパを感じました。

第2部は、朗読の日本語の美しさと力を感じました。言葉は声に出してみてこそ本物ですね。

第3部は、それと同じ意味でポーランド語を味わいました。ポーランド人の方々は毎年ポエジアに協力してくれますが、本当はあのようにしてポーランド語を楽しみたかったのだろうと思います。PC-スクリーンにより言葉の意味を理解することができました。このような日本語とポーランド語のコラボが本来のポエジアなんだろうと思いました。

ご出演の皆様、公演の成功おめでとうございます。

（小笠原正明、運営委員）

■タイトルの“Dziady ジャディ”には老人とか祖父の意味がある。古くポーランドの人々が信仰していたのは、古代スラブの神々であろう。しかし九世紀以前のスラブは文字を持っておらず、体系的なスラブ神話はフォークロアとして伝わるのみという。そうした土着の信仰をキリスト教が緩やかに取り込んでいった時代下の話である。

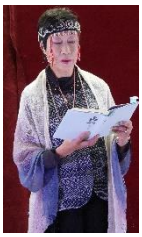
さて『祖霊祭』には4種類の霊が出てくる。罪の軽い、重い、中間の、そして終盤に出現する喪服の女に従う“亡霊”だ。文中に若い霊との言い方もあるから、死んで間もなく未練を背負ったままに迷っているなら、周囲を脅かす悪しき存在となるだろう。日本的に考えると、弔い上げし個性を失い先祖と融合するまで、一般的には50年を要し、それからやっと一族や子孫を保護する存在となるのだ。

このDziadyの儀式で霊をもてなす目的は、悪魔が生まれないようにするためだ。出産の世話人とされる故人の支持を得、その将来の平和のためにホストするということ。であるから何が必要かを聞き、彼らのために食べ物や飲み物を用意して歓待する。霊を怖がらせたりしないよう、騒がしくしないなどという禁止事項も多く、火を灯すのはさまよいの道で迷子にならないようにするためとされる。この死霊が付き従おうとする喪服の女は、血族の子孫かもしれないし、さまよう乞食といわれる“他の世界との交信者”かもはっきりしない。

ミツキェヴィチはこの作品を歌劇として考えていたという。ミサでの祈りは歌であり、歌は祈りである。キリスト教にせよ仏教にせよ、祖霊の住まう国に比べて天の国は遙かに遠いから、その天に向かって歌いあげようとしたのであろう。

村田は祭司役を仰せつかったが、荷が重い配役であった。なにせお相手は戦いの神であり、雷の神であるベルヌと思ってもいたものですから。

（村田譲、会員）



■特殊な今回の催しの前日はほとんど眠れず、不安一杯の本番でしたが、一人一人の実力・本領発揮。「火事場の〇〇力」出し合ってハーモニーをかなでました。調和!! 私も自作詩・詩集と共に伝わったようでほっとしています。何人かの方とお話できお名刺（先川先生）を頂いたり、映画の講師をされた池田さんとも話したり、新しい出会いに感謝でいっぱいです。少しずつ心身の調子ももどり、協会行事にもゆっくり参加を考えています。今はやや満足感にひたっております。津曲先生（2019年死去）と小笠原先生のご縁もわかり、あのとき急にお名前を出したくなりましたことふしぎに思っております…。

（菅原三栄子、会員）